

第3章 紀州徳川家の時代

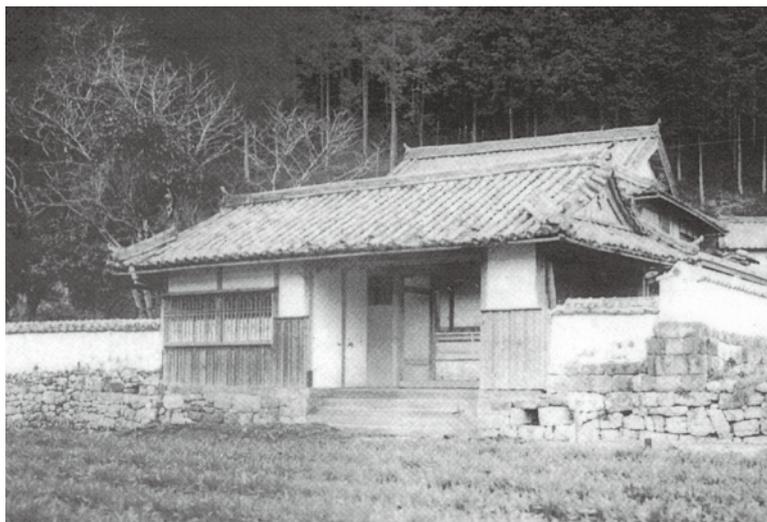


小山肆成と羽山大学

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

小山肆成京都へ遊学

小山 肆成(蓬洲)は、1807(文化4)年に日置川中流の周参見組の久木村(白浜町)で生まれました。兄の小山文明は学問を志し、京都へ出ましたが、修業中の1822(文政5)年、28歳の若さで急死しました。肆成も16歳のとき、医師になろうと決心して、京都へ出ていきました。兄の師であった岡田南涯の下で儒学を学び、高階枳園について医学の指導を受けました。また本草学(植物学・薬草学を分類するなどの博物学)の勉強にも励んで、医師として認められ、京都烏丸蛸薬師南に東風館を建てて開業しました。



小山肆成生家

天然痘の治療

19世紀前半の天保期、熊野地方で天然痘(疱瘡)が大流行し、1835(天保6)年の暮に肆成の許に甥の一家が疱瘡で死亡したという便りが届きました。肆成はその研究に取り組む決意をして「疱瘡退治」をしたいという書簡を送っています。

また、イギリスのジェンナーの牛痘接種法が中国へ伝えられ、これを研究しようと邱活川が『引痘略』という牛痘法(牛の疱瘡を取って種痘して治療する)の書物を刊行していました。1842年に肆成は師の高階枳園からこの本を入手し、和訳を行い『引痘新法全書』として、京都・大坂・江戸の三都の書店から出版しています。これにより、牛痘法が、日本国内へ知れわたりました。肆成は、牛痘法の研究をすすめ、1849(嘉永2)年に、わが国で最初に牛化人痘苗(天然痘予防弱性ワクチン)の実験に成功しました。人痘を子牛に接種して、その疱瘡を採って人に接種して効果を得る治療です。

牛痘接種法の啓発

肆成が、1847(弘化4)年に著した『引痘 不再染論』では、天然痘は伝染するが、一度かかれば再発しないので、痘を採り、よい種を選び、よいところへ植えて痘をつくと免疫作用になって再感染はしないと説いています。

しかし、引痘は生命を救う良い医术であっても、一般庶民には用いるのは良いが、身分の高い人に獣種などを使用してはならないと反対の声があがりました。肆成は、「龍骨、犀角、鼈甲など多くの禽獣を薬品にして服用している。生命を救い、病気を治すのに人間の家柄は関係ない」と退けました。

また、引痘は国産を用うべしとした「引痘宜用国産論」や、読みやすくした仮名まじりの『引痘新法全書附録』を、1849年に出版し、これらの書物によって牛痘接種法は、日本の人々にも知られるようになりましたが、肆成は、1862（文久2）年9月6日、京都で56歳の生涯を閉じました。

羽山大学の「彗星夢草子」から

幕末ごろ、日高郡北塩屋浦に住んでいた蘭方医師の羽山大学が、『彗星夢草子』という風説書を書いています。

異国船が日本の近海にあらわれるようになり、羽山大学もヨーロッパの事情にたいへん興味をもち、積極的に情報を集めています。とくに医師仲間からの情報の入手が多く、親しくつき合っている蘭学者や医師などから、幕府や朝廷の細かい内密のことまで伝わっていることがわかります。紀州を旅行する知識人たちが、羽山の家に宿泊したときにも最新の情報を入手していました。また知人の江戸話の藩士や江戸商人の手紙からも、紀州以外の日本各地で発生していることがらが伝わってきました。

日高郡は紀州廻船の中心地で、船持ちや船乗りが多くいました。1850年正月、伊豆沖で遭難した日高廻船天寿丸のようにアラスカに漂着する事件が起こり、鎖国下で外国を見てきた漂流民の話にも、羽山はたいへん興味を持っていました。

知識人との交流

羽山大学は、当時の日本の現状をたいへん憂い、日本の将来を心配していました。そのため、日本国内外の動きには強い関心を持ちました。羽山のまわりには、彼と考えを同じくする同志が何人もいて、当時の中紀地方（有田・日高両郡）で情報を交換して教え合うサークルができていました。

歌人で海防論者の日高郡江川組大庄屋瀬見善水、漢詩人で海防に関心の深い攘夷論者の有田郡栖原浦（湯浅町）の菊池海荘らで、学識豊かな豪農（広い土地と資産を持つ豊かな農民）と豪商（財力が豊富で手広く取引する大商人）たちです。菊池は江戸店を経営しており、全国的に幅広く知識人との交流がありました。また有田郡には、北海道で漁場を拓いた栖原角兵衛や、下総（千葉県）の銚子で醤油業を営んでいる浜口家もあり、そこからも東日本の情報が伝わっていました。

彼らは、取引先との間でできている商業ルートを通して、最新の全国的な情報を入手することができました。羽山大学らは伝えられてくる正確な情報を自らの生き方にどう生かすかを考えるとともに、郷土のかかえる問題はもちろん、紀州藩の改革や異国船へ対応など議論をしています。そして、それらをつき合いのある紀州藩士や近辺の農民・商人にも話し、さらに他国へも発信していきました。



羽山大学ゆかりの地（御坊市北塩屋）